校友時報

第35号
発行所
秋田県立能代南高等学校
新開部 電話 254番
編集人 加茂谷安弘
印刷人 秋田活版印刷株式会社

若人よ！樹木の如く!!

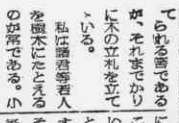
記念植樹に際し
小林学校長メッセージ

八月三十日午前、小雨そぼ降る中を、先輩、父兄、職員、生徒代表参列の上、校歌斉唱の後、生徒会長関剛之生の中に、鍬谷、小野両君オリンピック大会出場記念植樹が行われた。緑濃やかなトメ松三本が、両君の初撒によって植付けられたのである。一都市から一度に二人のオリンピック選手を出すという秋田県としても空前の盛事を記念するため県体育協会ではかねて能代市に植樹をやりたい考を持っていたそこでその場所をどこにするかということになり、公園とか市役所前とか色々の説が出たが、結局両君はどこまでもよく同君の功をたたえると共に、後輩への刺戟とすることに決したのである。その主旨は、両君の偉業を持つ樹木のごとくすべての面が大きくなる様ではない。その主旨や水分やそのものの条件がかね具わったときに初色々の条件がかね具わったときに初色々の条件がかね具わったときに初色々の条件がかね具わるのである。人も同様で、どんなの前に、自然石にそれぞれ素質を持っていても、眠った高き四方は自らそれに培わなければ、その人かりの記念碑が建は決してのびることは出来ない。

已に培うものは已である。已の素質を見究めて出来る限りの努力をなすべきである。努力とそしてこの世に生れ来たった以上、自分の天分をもめる筈であることは人生最大の快事ではあるまいか。Byrd ambitionne、とゆう有名な言葉がある。若人はすべからく大望を抱くべきである。そして自己に満ち、張り切った毎日を送るべきである。「事は成るの日に成るにあらず。」である。将来の大成を待つものは、一日一日の努力を積み重ねねばならぬ。これである。諸君が見事難関を突破せが本校を訪問。授業参観後本校生徒代表と二回にわたって座談会を開き生徒会活動状況を巡べ合い終止たどやかに論議を展開した。これが終って五時間目より本校生徒の中に入って一緒に授業を受け同日三時帰郷した。

説論 我々自身のもの

生徒会評委員長もきまっていよいよ後期の生徒会活動が始まる。この期に及んで我々は、今までの活動状況を振り返って見る必要があろう。各方面から何回となく叫ばれたにもかゝはらず、我々は生徒会に対して余に無関心で押し通して来た。現在の状況から判断しても我々は依然としてこの状態のまゝになる傾向が見うけられる。我々の関心なくして生徒会の進歩発展はなく、ひいては学校生活の向上も望めないのである。生徒会は単に生徒会員だけのものではなくむしろそれを選ぶ我々自身のものであると云う事を我々は推



よりもよく知っている筈である。ここに無関心だと云う言葉が出たがこの語は、我々東北人の弱性である補版的ななぞ和系に物語っている。何事にも積極性のない方の不利な立場に立たされる場合が一般に多い。この欧者すべきなる弊風を打破するのは我々生徒の外はなく学生生活でそれを生み出さなければ厳しい省察と反省に依て生み出す民主社会は得ないのではなかろうか。所が然前要な問題であるべき生徒会が現状のまゝでは到底その責務はなし難い。勿論生徒会の直接の目的も結局そこに帰着すると云う事が出来、民主主義生活実践の根本もこゝにあるのである。人々はこの事に対して単なる理想論で片附けてしまうかも知れないが我々はその理想に積極的に近んでこそ、人間の向上があると云う事をよく知っている。いわゆる生徒会の理想のあり方は決してそんなにむずかしいものでもなければ困難なものでもない。常に積極的に関心を持って成行きに注目し悪い所があった場合は忌憚なく批判し合い、改善すべき所は改良し、良い所があった場合は激励し合ってその長所をより伸ばす様にしなければよいのである。問題は我々が生徒会に我々自身のものであると云う事をより強く心に認識する事である。

受験対策としての学校当局の活動が活潑になって来た。連日の補習授業、模擬試験、近ずいて来る定期中間試験に我々はやゝ悲鳴をあげざるをえない。

なお、十二月には校長より全校生徒に対する創立記念に関する訓話があった。

創立廿七周年

本校年中行事の日、生徒に対する創立記念に関する訓話があった。

屋間立廿七周年記念行事は明天に迫る。去る二十三日午前九時より挙行されたその幕をあけ本校各文化部に於ける成果を一日の晩、あと半年はあっという間に過ぎ去ってしまうかも知れないのである。何が、或は諸君の一生を支配する力知れないのである。何時せんとする人は、その方面の勉強をなすべきである。大学に進学しようとする人は、まず全学力を傾注して準備に没頭すべきである。時あたかも彼岸親しむべきの候である。三年生諸君の奮起一番を切望する次第である。

展覧会で賑わう
高校五年間の歩み

まず午前より井論部主催の部中学校弁論大会が行われ次代の郷土を荷負う少年達の熱弁に会場は終止拍手にわいた。又陸上では美術部主催の図画、書道、写真展と理科製作品の展覧会等があり本校文化向上の為寄与するところ大なるものがあった。そして同日午後五時をもってその多彩な幕を閉じた。

木村君委員長に
後期正副委員長決る

本年度後期委員長選挙は三十日屋時間委員一斉に行われ、さきに選出された五名の候補者のうちから木村信逸君が圧倒的多数を得て当選した。又副委員長選挙は翌一日行われ、委員長候補の残り四名の中から、菊田稔君が選出された。

委員長
当選 木村 信逸 二四九票
次点 菊田 稔 一二一〃

副委員長
当選 稔 二六三票
次点 菊田 豊 一四五〃

二学期行事決る

九月
十四（日）体操東北大会（仙台）
二十日（土）全国九地区野球秋田予選大会（八橋）
二十一日鹿北港校陸上競技大会（十二所）
二十一日（月）創立記念校長訓和、郡市中学校弁論大会
二十三日（火）秋分の日、創立記念日展覧会
二十四日（水）
二十五日（木）
二十六日（金）模擬試験

校友の声

選手の出迎えを

県民大会帰りの各部選手を迎えに行って感じた事であるが、迎人の少数なのに驚いた。各選手は一般に復帰つて来るので、その為か一、二年生はほとんど見受けられず、大部分が三年生であった。その三年生の数もわずか四五十人に すぎなかった。各部選手が全力を傾して闘って来たのに対して、その勝ち、負けはどうであろうともまず心から「ご」に謝む。

（三年 K）

編集余談

最近風紀面が目立つて乱れて来たようだ。校内では設備せよ、上級生には敬語を使え、町で行き会った時には敬礼しろ、服装をきちんと正せ、と昨年あれほどやかましく生徒へ注意した風紀部も今年はあきらめたのかさっぱり音が出なくなった。▼そのためかどうか最近風紀の乱脈ぶりが少し度を越しすぎた感がある。▼特に校売でパンを売る様になって以来パンを食いながら廊下を闊歩しかも中味のアンだけを食い、食べ残した皮をどこにでも捨てるにおいては言語同断である。一つこゝで風紀部の御出動を仰ぎたいものであると同時に校友諸君の猛省と自覚をうながしたい▼しかしそれと反対にいくら良くなったと言っていた下駄の盗難事件が昨年に較べてごっと減ったのは嬉しい。だがそれは盗難が全く絶えたというのではない。やはりあわれむべき行為が相も変らず繰行されているのが、現状である。

消息

△高橋先生（化）御移転
先日まで寄宿舎に住んでおられた高橋先生御一家はこのほど左植樹を本校操場に手と共に関係者の

校操場に植樹された。
市内、鳳町通分二ノ二二

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

伸びよ母校と共に
小野 鍋谷 両先輩記念植樹

はるかヘルシンキのオリンピック体操競技に於いて見事日本五位入賞の原動力となった本校の生んだ小野、鍋谷両先輩の大活躍ぶりは すでに周知の通りであるがその前先輩が去る八月二十六日と共に元気な姿で帰郷された。その翌々日には忙しい中を本校を訪問、本校生徒に対してオリンピック土産話をしてくれ、終止たどやかな雰囲気の中に有意義に終了した。

又翌日にはオリンピック出場を記念する記念植樹を本校操場に手と共に関係者の

くろうさん」と迎えてやるのが当然であろう。しかも校友諸君はすべて後輩部員である。予習も大事だろう、部選手を迎えに行く寸暇をさいて駅まで一つ走り出迎えるだけヒューマニティを我々は持つてもよいのではないだろうか。我々が拍手を持って出迎える事に依って選手一同はどれほど、ほっとするかわからない。この事を良く考えて今度選手が帰って来る時には市内の者は全員こぞって出迎える事を切望も大切だろう。しかしその復習も大切だろう。しかしその

秋！
絶好の読書シーズンです
学生諸君！このチャンスを逃がすなかれ！
★ 各種参考書 ★
★ 雑誌 ★
★ 新刊図書 ★
冨町 鴻文堂書店

「燈火親しむの頃」となりました
読書するなら
当店を御利用のほどを
学習参考書
新刊図書
雑誌
島町 一長堂書店
デンワ 五〇番

読書の秋
良書をいつも豊富に
学生諸君必携の書を
取り揃えてある
駅前 東山堂書店
TEL 823

能代駅前
和洋菓子
卸問屋
合資会社 村上商店
電話 五四六番

初秋にふさわしい
あらゆる靴と鞄と
旅行用品
田村靴店
TEL 二九三